慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	袁枚と『子不語』：小説家としての意識を中心に
Sub Title	Yuán Méi and "Zi bù yǔ" : As a writer of classical short stories
Author	星野, 明彦(Hoshino, Akihiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1987
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.51, (1987. 7) ,p.69- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

袁枚と『子不語』

――小説家としての意識を中心に――

星野明彦

(一)

中国小説史の上で宋・明代は所謂「白話小説」の時代であり、その隆盛のために、六朝志怪・唐代伝奇と発展してきた「文言小説」は影を潜めていたが、その底流は絶えることはなかった。しかし、続く清代に入ると、先ず康熙年間に現われた蒲松齢(一六四〇―一七一五)の『聊齋志異』の流行を一つの契機として、後世その模倣作も誕生し、志怪書は再び活気を取戻し始めた。この機運に拍車をかけたのが蒲松齢に遅れること約八十年、乾隆年間に文壇の領袖として活躍した紀昀(一七二四―一八〇五)と袁枚(一七一六―一七九七)であった。両者は共に『聊齋志異』に対して批判的態度を標榜しているが、とりわけて紀昀は反聊齋の姿勢を明確に示し、『閱微草堂筆記』を著わして、後世その体に倣った多数の模倣作を生んだ。こうして聊齋流・反聊齋流が両々相俟って、志怪書は六朝唐代の如き盛行を迎え、清朝末期の「文学革命運動」に於いて、文言小説が完全に終止符を打たれるまで脈々と書き続けられた。

かくの如き清朝に於ける志怪書復活からその終焉までの過程にあって、後述の如く『聊齋志異』に対して「聊齋志異は殊に佳なれども惜しむらくは太だ敷衍せり」と評した袁枚の晩年の著作である志怪小説集『子不語』(別名『新齊諧』、正編二十四巻、続編十巻)は、『聊齋志異』、『閲微草堂筆記』と共に注目されるべき作品集でありながら、二書に比して、その研究が進捗しているとは言い難い。本稿は、彼の残したその他の著述及び説話の系譜を通して、志怪書としての『子不語』の特色を明らかにし、併せて『子不語』が袁枚の生涯の文筆活動に於いて、どの様な位置にあり、如何なる意識を以て著述されたのかといった点について、少しく私見を述べたいと思う。

(二)

袁枚(1)は字を子才といい、簡齋と號したが、致仕の後、その半生を過した江寧(南京)の小倉山下の居宅の名に因んで、世に隨園先生として知られた。袁枚は康熙五十五年(一七一六)、錢塘(浙江省杭州府錢塘県)に生まれた。父は名を濱といい、読書人であったが、各地の幕客となっていたため、自ら「家貧しくして書を買うを夢む(2)」と述べているが如く、家は貧しく、その幼少の時期は相当苦労をしたらしい。だが、その俊才は少にして現われ、十二歳で県学の生員となった。

乾隆元年(一七三六)、当時廣西の巡撫の幕客をしていた叔父の鴻を訪ねた枚は、巡撫の金鉄にその異才を見出され、その年の博学鴻詞科に、最年少者として推薦されたが、惜しくも及第しなかった。しかし、翌々年の順天郷試には及第し、翌乾隆四年には二十四歳の若さで進士となり、翰林院庶吉士に選ばれた。散館の後、江蘇省溧水県の知県に任じられた。その後、同じ江蘇の江浦・沭陽の知県を経て、江寧(南京)の知府となったが、乾隆十三年には病を得て官を辞し

た。同十七年、陝西省に再び官を得たが、父の喪に遭ってからは遂に官に仕えず、嘉慶二年(一七九七)、八十二歳で卒するまでの約四十年間、江寧城西に買い求めた隨園を本拠として、豪奢な生活を営みつつ、悠々自適の生涯を送った。

この隨園での半生に集約される袁枚の文筆活動の中心は、詩作及び独自の詩論の提唱であった。隨園をこと有るごとに改築し、賓客らを招いては詩酒の会を催し、また同年の進士であった〈格調説〉の提唱者、沈德潛との論戦を経て、徐々に確立された詩論は、既製の価値観の逆転を生んだ明末清初の時代風潮を反映したものであった。世に〈性霊説〉として知られるその詩論は、形式的な束縛を受けず、人間の性情の自由な流露を最も重視するという平易な方向であったため、万人大衆に支持され一世を風靡した。

こうして詩壇ひいては文壇の重鎮としての地位を確立した袁枚ではあったが、その晩年には文筆活動に少しく変化が生じ、『子不語』・『隨園食單』等の小説・雑著の類の執筆に着手した(3)。このような変化が生じた要因として、袁枚と同じく、その晩年に至って志怪書を執筆した紀昀は、時間的余裕と文学精神の衰退を挙げている。

『閲微草堂筆記』・「灤陽消夏錄」自序

昼夜無事、追錄見聞、憶及即書、都無体例。

(一日が長く、用事も無かったので、見聞を追憶しながら記録したが、思い出すまま記したので、統一した体裁などはない。)

同書・「姑妄聽之」自序

今老矣、無復當年之意興、惟時拈紙墨、追錄旧聞、姑以消遣歳月而已。故已成灤陽消夏錄等三書、復有此集。

(今はもう年とってしまい、もはやかつての文学意欲もなくなり、時たま紙筆をとっては昔聞いたことなどを追憶しながら記録し、せめてものうさ晴らしにするだけである。このような訳で、以前に書した「灤陽消夏錄」等の三

書のあとに、またこの集ができたのである。)

同書・「灤陽續錄」

景薄桑榆、精神日減、無復著書之志。惟時作雜記、聊以消閑。灤陽消夏錄等四種、皆弄筆遣日者也。

(人間も晩年に近づくと、精神も日に日に減退するもので、まとまった書を著わさんとする気力もなくなってしまう。ただ時たま雜記を書いてせめてもの暇つぶしにするだけである。「灤陽消夏錄」等の四編は、孰れもつれずれの筆のすさびであった。)

すでに指摘されている如く、袁枚にも紀昀の言う「文学精神の衰退」を示す発言が見られる(4)。彼等のこうした発言の背景には中国に於ける伝統的な小説観が窺えるであろう。儒教の支配下にあった旧中国の知識階級にとって、小説類の執筆は、如何にその対象に興味を抱き、精力を傾注しようとも、その文筆活動に於いては「正道ならざるもの」であり「余技」と見做されてきた。彼等の一連の発言が、この伝統的な意識に根差したものであったことに疑問の余地はあるまい。つまり紀昀も袁枚もその執筆を余技の作として位置付け、その意識を示し、強調せんがためにこうした発言を行ったのであろう。

だが彼等の「余技」に対する認識には著しい相違が見られる。それは言うなれば正統的学人と在野の文学者との文学観の相違であった。『四庫全書』の総編纂官であり、「著書」に対して独自の見識を持っていた紀昀は、その余技の作に於いても自らの見識に基づいた厳格な態度を以て執筆した。それに対して袁枚の執筆態度には遊戯的精神が見られる。その態度とは袁枚をして言わしむれば所詮「正統ならざる」執筆であるからには、たとえその内容に不道徳な部分があったとしても憚ることなく自由に執筆するという態度である。つまり袁枚は「余技」であるからこそ遊戯的精神を発揮させ得るものと見做していたのである。

このような遊戯的精神は『子不語』の随所に散見せられるが、その一例を挙げるならば『子不語』という書名それ自体にも、彼の遊戯的精神の一端が窺えるであろう。『子不語』という書名は、言うまでもなく『論語』「述而第七」に見える「子不語怪力亂神」(子は怪力乱神を語らず)に基づく。袁枚は己が志怪書の命名に際し、この孔子の言を逆説的に用い、孔子が話題として取り挙げなかった怪異・勇力・悖乱・鬼神といった内容について敢て語ってみせるという意志を表明したのである。それは恰も、孔子の様な聖人は「怪力亂神」などの怪しげなことは語られなかったが、自分の様な俗人は語らずにはいられないのだと語りかけているかの様である。つまり『子不語』の命名は袁枚特有の機知によるものであると言えよう。さらに袁枚は『子不語』の巻首に「隨園戯編」と題し、自らの書を戯れの作であると言明している。彼は『子不語』の中で大いに戯れんとし、その態度を先ず第一に標榜したのであった。

『子不語』に見られる「遊戯性」は志怪書としての本書の特徴となる要素であるが、袁枚は遊戯(あそび)の精神と同時に一流の文人としての意識をも忘れてはいなかった。彼はその執筆の過程に於いて時には遊戯の精神の趣くままに筆を走らせ、また時には文人としての意識の下に遊戯の精神を抑圧し、自己の文学観や見解を述べている。『子不語』は正にこうした相反する二つの意識が錯綜しながら成立したのであった。では彼の文人としての意識とは具体的には如何なるものであったのかを少しく見てみることにしよう。

(三)

袁枚は『子不語』の自序(5)に於いて、如何にも文人らしい筆致でその執筆動機を述べつつ、自己の文学論を展開している。その冒頭に於いて

怪力亂神子所不語也。然龍血鬼車繫詞語之。左邱明親受業於聖人、而内外傳語。此四者尤詳、厥何故歟(6)。

(怪力乱神は孔子が語らなかったものである。ところが龍血とか鬼車といった怪しげな事柄を『周易』は語っているし、また左邱明も聖人に教えを受けながら『左傳』、『国語』を著わした。此等の四者(7)が特に詳細に語っているのは何故であろうか。)

と述べる。この発言は儒教倫理に背いた己が執筆に対する巧みな自己弁護であると考えられる。袁枚は疑問を抱きつつも、古えの賢人たちの著述に孔子が否定した怪異の談があることを指摘し、これら賢人を自らの先例とすることによって、自己の正当性を主張したのではなかったか。

こうした儒教を意識した発言に続いて

蓋聖人敬鬼神而遠之、人教方立。周易非取象幽渺不足以窮天地之變。左氏恢奇多聞垂爲文章。其理並行而不悖(8)。

(思うに聖人は鬼神を敬いつつ、これを遠ざけるとして、人の模範となる教えが始めて成立した。だがもし『周易』が「象」を幽渺なものに取っていなかったならば、天地の複雑な変化を極めることはできなかったであろう。左邱明は不思議で広い見聞を文章として残した。この相反する二つの論理は並行されても互いに妨げにはならないのである。)

と述べ、独自の文学論を展開する。前段と同じく孔子の言を引用し(9)、次いで聖人の著述を列挙するという構成を取っているが、その心理は少しく異っている。即ち、前段が儒教倫理の束縛を感じた上での発言であるのに対し、この発言は孔子が否定した内容の中にも「天地の変を極めるに足る」ものがあることを示唆することによって、孔子の言に背いた執筆の意義を認めたものである。この一文には儒教倫理に拘泥せず、自由な文筆活動を提唱せんとする袁枚の姿勢

が窺われているであろう。

儒教的・反儒教的な両面を覗かせた袁枚は次いでその執筆動機を

余生平寡嗜好。凡飲酒度曲摴蒱、可以接羣居之懽者、一無能焉。文史外無以自娯、不得不移情於稗乘(10)。
(自分は平素楽しみが少なかった。酒や音曲や博打といった皆で集まって楽しめる遊びなどは一つとしてやらぬ。従って文学などの外に楽しみがなく、小説に心を移さざるをえなかった。)

と説明する。紀昀にも同様の発言が見られることは前に指摘した如くであるが、彼らの執筆は単に余暇だけから開始されたものではなかった。

袁枚はさらに続けて、その執筆の理由を以下の如く述べている。

廣記尚矣。睽車夷堅二志缺略不全。聊齋志異殊佳、惜太敷衍。於是就數十年來聞見所及、足以游心駭耳者、編而存之(11)。(以下略)
(『太平廣記』は遠い昔のものである。宋の郭象の『睽車志』と宋の洪邁の『夷堅志』は残念なことに欠略していて完全ではない。『聊齋志異』は特に好い作品ではあるが、惜しいことに余りにも敷衍している。そこで私は数十年来見聞したことで心を遊ばせ、耳を驚かせるに足るもののみを集めて残しておくのである。)

この発言で特に注目すべき点は、先人の志怪書に対する評価であろう。袁枚は膨大な先人達の志怪書の中から『太平廣記』・『睽車志』・『夷堅志』及び『聊齋志異』の四書に限って評価を下しているが、それは袁枚が特にこの四書を強く意識していたからに他ならない。だがこの四書に対する彼の評価は正に相反するものである。即ち、『太平廣記』・『睽

車志』・『夷堅志』の三書に於いてはその価値を認め、恰も自らの著述の範とするが如き好意的な評価を下しているのに対し、『聊齋志異』に関してはその文学的価値を認めながらも批判的な態度を示している。では何故彼はこのような評価を下したのであろうか。先ず三書について考えてみることにしよう。

袁枚の好意的な評価の背景には、志怪書に於ける「正統性」を意識した価値判断があったと考えられる。正統性とは言うまでもなく「事実の記載」という志怪書の基本的体裁を遵守し、且つ物語としての潤色を施さぬものの意であるが、彼はこの三書の中にその正統性を見出し、歴代の志怪書を代表する作品集であると見做していたのである。この三書の内とりわけて『夷堅志』は「正統的志怪書」とするに相応しい極めて厳格な体裁を以て記されてをり、袁枚もこの書を特に強く意識していたらしく、「余續夷堅志未成。到杭州得逸事百餘条。賦詩志喜。」(『小倉山房詩集』巻二十六所収)という題の詩をつくり、自らは『夷堅志』を継承するものであるかのような態度を示している。さらに蒲松齢・紀昀・錢大昕にも『夷堅志』という書名を自らの詩文に引用している例が見られるが(12)、彼等は孰れも袁枚と同様の認識に基づいた引用を行っている。『夷堅志』は当時の文人達に「正統的志怪書」を代表するものとして認識されていたと思われる(13)。

袁枚はその詩に於いて、『夷堅志』を継ぐものであると言明し、また『子不語』の序では『睽車志』・『夷堅志』の欠略を補い、より完全なる志怪書を編し、かの『太平廣記』を継がんとする態度を言外に匂わせた。つまり彼は、すでに評価の一定した先人の志怪書の継承者であるが如く述べることによって己が志怪書の正統性を主張せんとしたのである。

次に『聊齋志異』について考えてみよう。

『聊齋志異』は周知の如く、清初に於ける志怪書復興の契機となった作品集であり、後世多くの模倣作を生んだ当時

最も流行した志怪書であったが、袁枚はこの書に対して、その欠点を「敷衍」であると指摘した。敷衍とは一般的には物事をおしひろめて説明するという意味であるが、袁枚はこの言葉を否定的に用いて(14)、『聊齋志異』が蒲松齢の感性によってひきのばされ、しかも潤色されすぎていると批判したのである。正統派の文人にとって、志怪書に於ける敷衍の否定は至極当然な主張であり、袁枚と同様の発言を紀昀も行っている。それは『閲微草堂筆記』・「姑妄聽之」に付された彼の門人盛時彦の跋に紀昀自身が語ったこととして記された一文である。

聊齋志異盛行一時、然才子之筆、非著書者之筆也。

(『聊齋志異』は一時期大いに流行したが、それは才人の作品にすぎず、書物を著わさんとする者の作品ではない。)

紀昀は『聊齋志異』を「著書」ではないと論断した。彼はその理由として、蒲松齢が一書の中で六朝志怪と唐代伝奇の二つの文体を使い分けていること、そして作者自身が経験したはずのない出来事を余りにも恣意的に詳細に描写していることの二点を挙げている。

そしてさらに

留仙之才、余誠莫逮其萬一。惟此二事、則夏蟲不免疑冰。

(蒲松齢の才能に自分は万に一つも及ばないが、ただこの二点だけはどうしても納得がゆかぬ。)

と述べ、蒲松齢の才能は認めながらも、この二点を欠点として指摘しているのである。

結局のところ、彼らの批判は志怪書に於ける「正統性」を意識してのものであった。もし仮に「正統性」という尺度

で測ったならば、事実を敷衍した『聊齋志異』をその範疇に加えることは到底できまい。ところが現実にはその正統ならざるものであるはずの『聊齋志異』が流行していた。彼等がその流行を快しとしなかったことに疑問の余地はあるまい。彼らはその流行に疑問を感じ、『聊齋志異』の模倣に終始せんとした当時の風潮に一石を投ぜんとしたのであった。

だが同時に袁枚はその文学的価値を認める発言をも行っている。彼の発言は物語に於ける敷衍の否定であった。それは正しく『聊齋志異』が描き出した妖しくも幻想的な世界の文学的価値を完全に否定することになるであろう。にもかかわらず彼は、「殊に佳」であると評し、自ら矛盾を引き起こしている。この矛盾は、彼の一流の文学者としての感性によって生じたものであろう。袁枚は正統派の文人として『聊齋志異』を批判したが、同時に非凡な文学者として感覚的にはその価値を認めざるをえなかったのである。彼のこうした感覚は、結局最後まで動かし難いものであった。それ故、後述する如く『子不語』の説話は、時として『聊齋志異』に勝るとも劣らぬ敷衍を展開しているのである。

以上、『子不語』の序に於ける袁枚の主張を考えてみたが、それらは孰れも正統派の文人、若くは一流の文学者としての発言であった。彼の一連の発言は些か気負った態度であるかのように見えるが、袁枚はその意識の上でも、また己が立場の上からも、このように発言せざるをえなかったのである。彼は一流の文学者を自認し、しかもすでにその地位を確固たるものにしていた。であるからこそ、たとえ己が書を「戯れの作」であると規定したとしても、その作を執筆した然るべき理由付けを行なわなければならなかったのである。では何故然るべき理由付けを行なう必要があったかと言えば、そもそも如何に主張しようとも志怪書の執筆は孔子の言に背くものであり、ましてやその内容が作者によって潤色されていたならば、『聊齋志異』がそうであったように、今度は自分の書がその批判を受けることになる。それ故、袁枚は予め正統的な理由付けを行なうことによって、予想されうる批判に対処せんとしたのであった。こうした理由付

けは或いは批判を逃れるための単なる口実にすぎないかもしれないが、彼に一流の文人としての意識が潜在していたからこそ『子不語』は完全には「戯れの書」にはなり得なかったのである。巳に周知の如く、『子不語』は最終的に『新齊諧』と書名を変更され、この序も大幅に書き換えられ、極めて穏やかな発言になっている。袁枚は書名変更の理由を、元人の説部に同じ書名があったためであるとしているが、おそらくその背景にはこうした意識が強く作用したからではなかったか。

さて、以上見てきた如く、袁枚には遊戯性と正統性という相反する意識が同時に存在していた。『子不語』の説話の多くはこうした二つの意識をよく反映しているように思われる。魯迅は『中国小説史略』第二十二篇「清之擬晋唐小説及其支流」の中で『子不語』を『聊齋志異』の末流に属するものと見做した上で、

其文屏去彫飾、反近自然、然過于率意、亦多蕪穢。自題戯編、得其實矣。
（その文章は彫琢と装飾を排除し、かえって自然なものに近づいているが、思いのままにしすぎて、まとまりがなくなっている。自ら「戯編」と題しているのは、その本音であろう。）

と評しているが、これも正に袁枚の二面性を指してのものであろう。魯迅が指摘する如く、『子不語』は原則的には簡潔な筆致で描かれているが、作者の自由な感性によって物語が大いに潤色され、遊戯的精神が展開されている説話も、決して少なくない。

次に彼の意識が発揮されているとおぼしき説話を幾つかの類型に分けて見ていくことにしよう。

(四)

袁枚の意識によれば、『子不語』の説話は、概ね二種に大別することができる。以下、さらにその二種を細分類し、それぞれの類型の特色を見ていくことにする。

㈠　正統性を意識した説話。

この項目に属する説話は、「事実の記載」という志怪書の原則を守り、勉めて物語に於ける潤色を施さぬ簡潔な筆致を見せているものである。

①　単に怪事を記録したにすぎない説話。

貘(巻六)、一棺藏十八人(巻九)、奇勇(巻十六)、鬚長一丈(巻二十一)、網虎(同巻)、盤古脚迹(巻二十二)、珠重七両(同巻)、泗州怪碑(巻二十三)、口琴(同巻)、天開眼(巻二十四)など。

これらの説話の特色は、その記載が極めて簡潔であり、出来事を記録しただけの短文となっている点にある。例えば「網虎」という説話は、

江西鄱陽湖漁人収網、疑其太重、解而視之、斑然虎也。惜已死矣。

(江西の鄱陽湖の漁師が網を片付けていたが、非常に重いので不思議に思い、開いてみると、まだらの虎であった。残念なことにもう死んでいた。)

と述べるにすぎない。正しく史料とも言うべき筆致であり、伝統的志怪書にも屢々見られる類型であるが、この類型に

属する説話は『子不語』の全体数からすると余り多くはない。

② 先人の志怪書に見られるプロット或いは筆致を真似た説話。

夜叉偸酒(巻三)、捉鬼(巻五)、祭雷文(巻六)、鼠嚙林西仲(同巻)、曹能始記前生(巻十三)、萬佛崖(巻十六)、土雨(巻二十二)、水怪吹氣(同巻)、爲兒索債(巻二十四)、牛乞命(同巻)、猪乞命(同巻)など。

この項目に属する説話は、その原型が先人の志怪書に見え、その筆致も原型に類似したものであり、『子不語』に於いては相当数を占めている類型である。一例を挙げれば、「牛乞命」は、食用にされんとした牛が、ある人の所に逃げ込み拝礼をしたことから、その人に買いとられ命が助かったという説話であるが、その原型と思しきものが、すでに『太平廣記』巻四百三十四所引の説話の中に見られる(15)。両書を比較してみると、その構成も筆致もほぼ一致している。

(二) 遊戯的精神が見られる説話。

この項目に属する説話は、袁枚の自由な発想に基づくもので、『子不語』の特色とも言うべき遊戯の精神を窺わせるものである。

① 卑猥な表現が見られる説話。

斧斷狐尾(巻五)、無門國(巻十五)、清涼老人(巻十七)、採戰之報(同巻)、木皂隷(同巻)、女化男(同巻)、錢仲玉(巻十九)、玉梅(同巻)、熊太太(同巻)、蔡京後身(巻二十一)、暹羅妻驢(同巻)、風流具(巻二十三)、控鶴監秘記(巻二十四)など。

これらの説話の中、「控鶴監秘記」は全篇が卑猥な語で綴られている。他の説話は一部卑猥な表現を挿入しているに

すぎないが、その部分は「控鶴監秘記」同様あからさまである。二説話を例にとって見てみることにしよう。「斧斷狐尾」という説話は、狐仙と兄弟の契りを結んだ男の様々な体験を中心に、狐の怪事を描いたものであるが、作者は大いにその筆を走らせている。例えば、物語の前半部分に、契りを結んだ男が狐仙に連れられ、空中から観劇をする場面が詳細に描かれている(16)が、この場面などは正しく作者の旺盛な創作欲によるものであると言えよう。この物語は次いで、狐仙が取り付いた娘を巡って、狐仙と男が仲違いを起し、最終的には娘は狐仙の子を生まされるという展開を見せるが、狐仙が女を寝取られる原因となった己が肉体の欠陥を語る場面の描写は、憚ることなく淫靡な語を連らねている(17)。こうした場面の挿入は物語を大変興味深いものにしているが、また同時に志怪書の枠をも完全に逸脱した創作となっているのである。さて、次に「女化男」という説話について見てみることにする。この説話は文字通り女が男に変化したという怪事を題材としたものである。この怪事は、『唐開元占經』引く所の『史記』・『後漢書』等に早くも記載されてをり(18)、古くから人々に衆知された題材であるが、特に明中期以降の筆記小説の類には、その記録が屢々散見せられる(19)。それらの記述は、二三の例外を除いて、概ね『史記』・『後漢書』の如き、簡潔な描写である。「女化男」も全体的には、史書の如き坦々とした筆致で記されているが、女が男に変化する際の詳細な描写は他書には見られない(20)。

志怪書に於ける卑猥な描写は『聊齋志異』を筆頭に、明末清初の小説類にも見られるが、それも『子不語』ほどあからさまではない。『子不語』も全体的には卑猥な描写が見られる説話は少ないが、正統派の文人を意識した袁枚の著作にこうした描写が見られることは注目に値するであろう。

② 同時代の志怪書と全く同じ説話。

人同(巻六)、喀雄(同巻)、常熟程生(同巻)、怪風(同巻)、孝女(同巻)、義犬附魂(同巻)、麻林(巻十五)、佟觭角(同巻)、淘氣(同巻)、白蓮教(同巻)、伊五(同巻)、落漈(巻二十三)、鉄公雞(同巻)、夜星子(同巻)、瘍醫(同巻)。

この十五則の説話と内容が全く一致する説話が和邦額の『夜譚隨錄』に見える。これらの説話について、前野直彬氏は両書の描写を細かく分析された上で、袁枚が『夜譚隨錄』を読んで、その文章を添削し、すでに刊行していた『子不語』に後から編入したものであろうと結論付けて居られる(21)。筆者も同様に判断しているので詳述は省略するが、特にこの判断の根拠とした事例を一点だけ指摘しておく。以下に示す『續子不語』巻五所収の九則の説話は、孰れも『閱微草堂筆記』「灤陽消夏錄」に見え、その内容も文章も、ほぼ完全に一致している。(括弧内は「灤陽消夏錄」の巻数を示す)

文人夜有光(巻一)、狐仙正論(同巻)、唐公判獄(巻三)、郭六(同巻)、劉迂鬼(同巻)、痴鬼戀妻(巻四)、狐仙懼内(同巻)、軍校妻(巻五)、飛天夜叉(同巻)。

『續子不語』も『子不語』同様その成立の時期を明らかにしていないが、少なくともその成立が「灤陽消夏錄」よりも後であったことは、その書中に「灤陽消夏錄」刊行以後の記事が見えることからも明白である。さらに袁枚は「軍校妻」と「飛天夜叉」の二編を、紀昀が烏魯木斉在任中に見聞したことであると記しているが、紀昀が自分が見聞したことを後になってから、そのまま引用し、自らの書に編入したとは考えにくい。以上の理由からこれら九則の説話は、紛れもなく袁枚が無断で引用したものである。彼は他書からの転載を全く意に介さなかったのである。

『子不語』は説話の出所を、殆ど記していないが、他人の書からの無断転載は、一流の文人にとって恥ずべき行為である。だが袁枚は自らの感性に合い、興味を引く内容であれば、自由に収録するという態度をとった。こうした文人に

あるまじき行為も、彼に遊戯の精神があったからこそ憚ることなく行なわれたのである。

③　小説的技巧を凝らした説話。

両神相毆(巻三)、陳聖濤遇狐(巻四)、洗紫河車(巻五)、地蔵王接客(巻九)、裹足作俑之報(同巻)、獅子大王(巻十)、醫妬(巻十一)、張光熊(巻十三)、狐鬼入腹(巻十四)、莊生(巻十五)、驢雪奇寃(巻二十)、成神不必賢人(巻二十二)、長樂奇寃(巻二十四)など。

これらの説話は、『子不語』の中でも比較的長文で、物語の構成も複雑である。一例を挙げよう。「洗紫河車」という説話は、古来屢々語られてきた冥界遊行譚であるが、その中には小説としての様々な工夫が凝らされている。例えば、物語の前半部分で、主人公である丁愷という男が、冥界に迷い込んだ直後に行き当った古廟の神像や牛頭が埃を被っているのを憐んで、すっかり掃除をしてやる場面がさりげなく描かれているが(22)、実はこの部分が物語の後半に於いて重要な意味を持つことになる。この説話は、丁の亡妻と冥界でその夫となっている牛頭の手助けによって丁が無事に現世へ生還するという大団円のうちに終わるが、物語の後半部分で、この牛頭が実は丁が先に情けをかけた牛頭であり、丁の恩に報いるため手助けをするという展開を見せている。つまり前半の場面は巧みな伏線となっているのである。さらにこの説話は随所に興味深い描写を配すことによって、読者を飽きさせまいとする作者の工夫が見られる。例えば、牛頭の夫が初めて登場する場面で、牛頭がその頭を取りはずすとそれは仮面であり、中は普通の人間と変わらなかったと述べる部分(23)や、牛頭夫婦が丁を持成す場面で、冥界の酒は飲んでもいいが、肉を食べると永久に現世には帰れなくなると亡妻が語る部分(24)などは、未知の世界である冥界について読者の興味を引き付ける巧みな描写であり、袁枚はこれらの描写によって単調になりがちな説話にアクセントを付けているのである。こうした説話の構成は、袁枚の作

家としての非凡な才能に依る所が大きい。彼はその才を大いに発揮して、物語を潤色したのである。それはもはや志怪書の枠を逸脱した行為であるが、彼がその枠を突破して才能を発揮し得たのは、己が『子不語』を「戯れの書」と見做していたからである。つまり袁枚の論理では、所詮戯れで執筆したからにはその内容が多少脱線しても構わなかったのである。彼はこの論理に基づいて、大いにその筆を振い、これらの説話を構築したのであった。

以上、袁枚の意識が窺われる説話の類型を見てきたが、『子不語』の小説としての魅力は正に遊戯性の展開であると言えよう。彼が見せた卑猥な描写や物語に於ける工夫によって、読者は十分にその世界へ引き込まれていく。この遊戯性とは、つきつめれば説話を面白くするための手段にすぎないかもしれないが、『子不語』を遊戯であると割切った袁枚にしてみれば、内容が新奇なもので、それが面白可笑しく描けていればそれで良かったのである。しかし、袁枚は徹底的には遊戯きれなかった。彼は正統派の文人の意識を以て、類型㈠の如き説話を残し、また魯迅が指摘する如く全体的には装飾をさけた簡潔さを見せた。つまり『子不語』はこうした二面性によって全体像のぼやけた正統的な志怪書とも完全な遊戯の書とも判断のつかぬ極めて中途半端な作品集となっているのである。

(五)

しかし、『子不語』に二面性があったことは確かにしても、袁枚が筆を執るきっかけは何であろうか。それは彼の『聊齋志異』に対する対抗意識であったように思われる。自らの文才に絶対的な自信を持っていたであろう袁枚にとって、『聊齋志異』の流行は鼻持ちならないことであり、それが如何に巧みに面白く描けていたとしても、所詮は田舎書生の筆にすぎず、自分ならばもっと粋で巧みな文章が書けるのだという自負があったに違いない。彼はそれが敷衍であり、

志怪書の枠を越えるものであることを重々承知の上で、『聊齋志異』を凌駕せんがため遊戯を展開して見せたのである。だがその遊戯も袁枚にしてみれば、計算されたものであった。こうした執筆態度は当時の知識階級から当然の如く、批判を受けたであろうが、袁枚はその批判に如何ようにも対処できる文学者としての地位も名声も得ていたのである。結局のところ、『子不語』という書は、功なり名遂げた隨園老人の勝手気儘な余裕の文学と規定できるであろう。またそう見做すことが、袁枚の本意に叶うものであるように思われる。しかし、これを小説として見るならば、『子不語』よりも『聊齋志異』の方が上回っている。蒲松齢は怪異の世界にのめりこみ、その幻想の世界に遊び、妖しくも美しい世界を展開してみせることに成功したが、袁枚は正統派の文人であるが故に、そこまで怪異の世界に陶酔することができず、一定の距離を置いた醒めた部分を持っていた。志怪書は事実の記載を建前とする以上、作者は醒めた眼を持っていなければならないが、こうした醒めた部分が実は『子不語』の小説としての妙味を半減させているように思われる。

なお、本稿では、特に触れなかったが、袁枚に見られる遊戯性の展開は、明末清初以来の時代思潮と深い関わり合いがあるように思われる。この点については、稿を改めて考えてみることにしたい。

［註］

(1) 袁枚の伝記については『清史稿』列伝二百七十二、文苑三。『碑傳集』巻一百七孫星衍「故江寧縣知縣前翰林院庶吉士袁君枚傳」。『惜抱軒文集』巻十三「袁隨園君墓誌銘」等参照。

(2) 『隨園詩話』巻五に見ゆ。

(3) 『子不語』はその完成の時期を明らかにしていないが、前野直彬氏「清代志怪書解題」(『中国小説史稿』Ⅲ—2　秋山書店一九七五)では、その完成を乾隆五十三年(一七八八)であるとする。

(4) 船津富彦氏「袁枚の小説論　—建前と本音について—」(『東洋学論叢』35　一九八二)参照。

(5) 『小倉山房文集』巻二十八所収。但しこの序文は、『新齊諧』と書名が変更された際に書き換えられたらしく、『新齊諧』の自序との間には文章に著しい相違がある。

(6) 『新齊諧』自序には「然龍血鬼車繫詞語之。」の下に「元鳥生商、牛羊飼稷、頌雅語之。」なる一文が見える。

(7) 『新齊諧』の自序によって補えば、この四者とは『周易』、『詩經』、『左傳』、『國語』の四種であると考えられる。

(8) 『新齊諧』自序はこの部分を「蓋聖人教人文行忠信而已。此外則未知生、焉知死、敬鬼神而遠之、所以立人道之極也。周易取象幽渺。詩人自記祥瑞、左氏恢奇多聞垂爲文章、所以窮天地之變也。其理並行而不悖。」とする。

(9) 「敬鬼神而遠之。」は『論語』「雍也第六」に見える。

(10) 『新齊諧』自序には「不得不移情於稗乘。」なる一文は見えない。

(11) 『新齊諧』自序では「廣記尚矣。啖車夷堅二志缺略不全。聊齋志異殊佳、惜太敷衍。」を省略し、代わりに「乃廣採游心駭耳之事、妄言妄聽、記而存之。」としている。

(12) 三氏には以下の著述が見られる。

蒲松齢《感憤》「漫向風塵試壯遊　天涯浪迹一孤舟　新聞總入夷堅志　斗酒難消磊塊愁　尚有孫陽憐瘦骨　欲從元石葬荒邱」（『聊齋詩集』巻一）

紀昀『閱微草堂筆記』「槐西雜志」自序「自今以往、或竟懶而輟筆歟、則以爲揮麈之三錄可也。或老不能閑、又有所綴歟、則以爲夷堅之丙志亦可也。」

錢大昕《丁巳人日　七十生辰　漫成》四首第一首「人日生朝恰立春　歡生七十白頭人　身如散木何妨病　家有奇書未算貧　嬾志夷堅排甲乙　怕繙雲笈守庚申　桑榆莫道垂垂暮　也被東風拂面勻」（『潛研堂詩續集』巻七）

(13) さらに袁枚の認識の背景には、乾隆年間に於ける『太平廣記』、『夷堅志』の刊行があったと考えられる。前者は乾隆二十年に黄晟（曉峰）によって出版され、後者はその一部が乾隆四十三年に周榮（信傳）によって刊行されている。

(14) 『隨園詩話』にも「敷衍」という言葉の否定的な用例が見える。「作詩不可以無我。無我則剿襲敷衍之弊大。」（巻七）「詩難其眞也。有性情而後眞。否則敷衍成文矣。」（同巻）

(15) 『太平廣記』巻四百三十四・「桓冲」・「光禄屠者」・「朱氏子」の三則が見える。

(16) 『子不語』巻五「斧斷狐尾」

一日丁謂呉曰我欲往揚州觀燈能否。狐曰能。河間至揚離二千里。弟衣我衣、閉目同行便至矣。從之憑空而起。両耳聞風聲。頃刻至揚。有商家方演戲。丁與狐在空中觀。忽聞場上鑼鼓聲喧。關聖單刀歩出。狐大驚舎丁而奔。丁不覺墜于席上。商人以爲妖、械送江都縣。

(17) 狐曰凡男子之陰、以頭上肉肥重爲貴。年十五六、卽脱穎出、皮不裹棱、嗅之無穢氣者、人類也。皮包其頭不淨、棱下多腐渣而筋勝者、獸類也。弟不見羊馬猪狗之陰、非皆皮裹頭尖而以筋皮勝者乎。出其陰示之、果細瘦而毛尖如錐。

(18) 『唐開元占經』巻一百十三「女化爲男」「史記曰魏襄王三年、魏有女子化丈夫。續漢書五行志曰獻帝建安七年、越嶲有女子化爲男子時、周群上言、哀帝時亦有此。將有代易之事、至二十五年帝封山陽公。」但し通行する『史記』にはこの記事は見えず、また『後漢書』五行志・五(人化)のこの記事は「越嶲有男爲女子」となっている。

(19) 女が男に化すという説話は以下の書に見える。

明・談遷『棗林雜俎』義集「女化男」。

明・徐慶秋『玉芝堂談會』巻十一「女化爲男」。

明・王圻『稗史彙編』巻一百七十二「女變男」。

清・王士禎『池北偶談』巻二十四・二十五「女化男」。

清・諸聯『明齋小識』巻十「女化男」。

清・蒲松齢『聊齋志異』巻八「化男」。

清・曹家駒『説夢』二「男女變易」。

清・宣鼎『夜雨秋燈錄』三集巻二「轉女爲男」。

清・兪樾『右臺仙館筆記』巻一・巻八。

なお『續子不語』巻十にも「女化男」の一則が見える。

(20) 『子不語』巻十七「女化男」。

耒陽薛姓女名雪姝、許字黄姓子、嫁有日矣。忽病危、昏瞶中、有白鬚老人、拊其身至下體、女羞澀支拒。白鬚翁迫以物納之而去。女大啼、父母驚視之、已轉爲男身矣。(中略) 陶海軒方伯以會審、來喚驗之、果然面貌聲音猶作女態、但腎囊微隙、宛然陰溝也。

(21) 註(3)所収、三〇二頁・三〇三頁。

(22) 『子不語』巻五「洗紫河車」

四川酆都縣皂隷丁愷持文書往夔州投遞。過鬼門關、見前有石碑上書陰陽界三字。丁走至碑下。摩觀良久、不覺已出界外。欲返迷路、不得已任足而行。至一古廟。神像剝落、其旁牛頭鬼蒙絲蛛網而立。丁憐廟中之無僧也。以袖拂去其塵網。

(23) 妻開門、牛頭鬼入。取牛頭擲于几上、一假面具也。既去面具、眉目言笑、宛若平人。

(24) 命丁坐、三人共飲。有殽饌至。丁將擧箸、牛頭與妻急奪之、曰鬼酒無妨、鬼肉不可食、食則常留此間矣。